

## 海を渡った?! 『キネマ旬報』

たじまなつこ  
田島奈都子

(青梅市立美術館 学芸員)

ここに興味深い写真がある。被写体はいずれも中国人女優であり、彼女たちが眺めているのは1938年1月1日発行の『キネマ旬報』第632号である。同年に公開された日満支合作映画「東洋平和の道」に出演した李明と白光は、その関係で来日したこともあり、これを機に前者はカルピスのキャンペーン・ガールに、後者は日本人の奥山彩子と、満州人ということになっていた李香蘭(=山口淑子)と共に、「興亜三人娘」の1人に抜擢された。

この《『キネマ旬報』を読む李明》(図1)と《『キネマ旬報』を読む白光》(図2)は、1938年2月11日発行の『キネマ旬報』第636号に掲載されていることから、前述した映画の紹介と同誌の広告を兼ねて、撮られたものであろう。しかし、彼女たちに関しては、日本の映画雑誌『映画之友』を手にして同様の写真も残っており、これらから察せられるのは、当時の李明や白光の周囲、つまり1930年代後半の満州や中国の映画界に、日本の映画雑誌が存在していた実態である。もっとも、日本の映画界に対する中国側の関心は、それ以前から存在したようで、1920年代後半から中国でも盛んに編集発行されるようになった、グラフ雑誌や映画雑誌を概観すると、日本の映画界に関する記事を見つけることは、それほど難しいことではない。しかも、それらは比較的時差なく、たいてい何らかの写真を伴って掲載された。

さて、これにさかのぼる5年前、1933年1月1日発行の『キネマ旬報』第458号の巻頭を飾ったのが、アメリカ人女優フランシス・デイを主題とした《フランシス・デイと香水瓶》(図3)の写真である。この作品は出演映画を広告するためのものではなく、彼女を主題とした肖像写真である。従って、『キネマ旬報』への掲載は、デイの存在や魅力を紹介することが、最大の目的であったと思われる。



図1：《『キネマ旬報』を読む李明》  
『キネマ旬報』1938年2月11日発行第636号



図2：《『キネマ旬報』を読む白光》  
『キネマ旬報』1938年2月11日発行第636号



図3：《フランシス・デイと香水瓶》  
『キネマ旬報』1933年1月1日発行第458号



図4：《香水瓶與美人》  
『玲瓏』1933年6月14日発行、第99期



図5：《阮玲玉の肖像写真》  
『聯華画報』1936年3月発行、第7巻第5号



図6：《陳燕燕の肖像写真》  
『聯華画報』1936年4月発行、第7巻第6号



図7：《曼英の肖像写真》  
『玲瓏』1936年8月19日発行、第250期

西洋絵画における鏡は、象徴的な意味合いを持つ場合もあるが、描かれた空間をより立体的に見せる手段や、画家の力量を示す小道具として、古くから用いられてきた。一方、写真における鏡は、光学的な効果や、対象構図を得る手段として利用され、《フランシス・デイと香水瓶》(図3)においても、鏡もしくは鏡面仕上げのテーブルにもたれたデイの顔が、傍らの香水瓶と共に反対面に映り込むことで、実態は1つでありながら、見える像は実と虚の2つという状況を生み出している。

女優の肖像写真として、華やかさや甘美さが前面に打ち出されたものに見慣れていると、デイの固く結ばれた口元と力強い眼差しには、違和感を

覚えるかもしれない。しかし、この写真が撮影された1930年代は、機械美が称賛されていた時代であり、《フランシス・デイと香水瓶》(図3)から漂う硬質な雰囲気は、時代の美意識とは完全に一致していた。

ところで、印象的な作品は記憶に残りやすく、1930年代の上海を代表する女性向け週刊誌『玲瓏<sup>リン</sup>』を見ていた際、この《フランシス・デイと香水瓶》(図3)が、1933年6月14日発行の同誌第99期に、《香水瓶與美人》(図4)として掲載されていることに気づいた。『玲瓏』編集部がどのようにしてこの写真を入手し、掲載に至ったのかは不明である。ただし、前述したように、日本の映画界の様子を知らせる記事や写真が、同時代



図8：《シルヴィア・シドニーの肖像写真》  
『キネマ旬報』1934年1月1日発行、第492号

の中国で編集発行されていたグラフ雑誌や映画雑誌に、出典が明記されないまま、しばしば紹介されていたことを考慮すると、『玲瓏』第99期に掲載された《香水瓶與美人》(図4)は、『キネマ旬報』第458号に掲載された《フランシス・デイと香水瓶》(図3)を転載した可能性が考えられ、両誌の刊行時期に半年間の時差があれば、それは十分に可能となる。

図画像を多く伴う書籍や雑誌の編集発行は、何かと手間隙がかかり、ましてや海外から必要とするものを直接得ることが、経済的にも時間的にも容易ではなかった戦前期、既刊本からの転載は、半ば公然かつ恒常的に行われていた。ただし、そのような経緯を経て掲載された画像であっても、一部の人物にとっては、それらが貴重な「学び」の機会や場となっていたことも確かであり、中国においては《香水瓶與美人》(図4)が、さらなる展開を見せることになった。

例えば、1936年3月発行の映画雑誌『聯華画報』第7巻第5号に掲載された、女優の《阮玲玉の肖像写真》(図5)や、翌月発行の同誌第7巻第6号に掲載された、女優の《陳燕燕の肖像写真》(図6)、及び同年8月19日発行の『玲瓏』第250期の表紙を飾った《曼英の肖像写真》(図7)は、いずれも《フランシス・デイと香水瓶》(図3)もしくは《香水瓶與美人》(図4)と、着想と構図が全く同じであり、このような関係性は、1934年1月1日発行の『キネマ旬報』第492号に掲載された《シルヴィア・シドニーの肖



図9：《徐来の肖像写真》  
『良友』1935年1月発行、第101期

像写真》(図8)と、1935年1月発行の、同時代の上海を代表するグラフ雑誌『良友』第101期に掲載された女優の《徐来の肖像写真》(図9)の間にも見て取れる。

映画女優にとって、自らを魅力的に撮影してくれる写真家は、巷の人気を左右しかねない、仕事上の重要なパートナーであり、その密接な関係性は、当時の南京路にあった滬江照相館という有名写真館が、上海電映博物館の中にジオラマとして存在していることからもうかがえる。従って、《陳燕燕の肖像写真》(図6)と《徐来の肖像写真》(図9)を撮影した陳嘉震のような、映画女優の肖像写真を専門に撮影する写真家の場合、周囲に外国の映画雑誌が存在し、それらに掲載された写真の構図やポーズを参考に、自ら「新作」を撮影することは、至極当然のことであったと思われる。

『キネマ旬報』を飾った外国人女優の魅惑的な写真が、中国の写真家に影響を与えたと思われる事実は、日本における同誌の利活用が、専ら図案家によって行われていたこととは対照的であり、その差異はなかなか面白い。ただし、それ以上に興味深いのが、中国においても同誌が愛読されていた可能性である。当時の映画雑誌が映画作品と同様に、グローバルな存在であったことを裏付けるこのような事例は、『キネマ旬報』には別角度からの研究の余地が、まだまだ存在することを示している。